

---

# リリカルなのは～空の波～

うわさ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカルなのは〜空の波〜

### 【Nコード】

N9110Z

### 【作者名】

うわさ

### 【あらすじ】

神様のうっかり殺された男。そして、転生の場所はリリカルなのは！そこには複数の自称・転生者。転生者は過去の黒歴史（赤ん坊時代）を抱えながらハーレムを目指す。

原作知識があまりない男は、死なないために頑張る。だが結局巻き込まれる運命の上に黒歴史がなく、親もいず、戸籍も無い男。

さて、この男に平和がやってくるのだろうか。または、一生やってこないか。

神様。いや、じいさんに再びうつかり殺されないようにと思い、願  
いながら……。。

## 転生（前書き）

初めて書きますが、関西の言葉わけわからん。あと駄文です。

## 転生

「突然だが、お主は死んだ。いや、うっかり殺しちゃった」

「はあ！？ 何言ってるんだ！ この爺さん、ボケているのか？」

「orz」

白髪のじいさんは、地面に手を突き落ち込んでいる。そして、「ボケてないもん、ただ少し物忘れが多いだけだもん」と繰り返し呟いていた。

「まあ、それより何だ此処」

「ボケてないもん、ただ少し物忘れが多いだけだ」話を聞け！  
おお、居るの忘れるところだったわい」

やっぱり、ボケてるんじゃない……

「お主の質問の答えはな、此処は天界。で、俺がこの天界の最高神ゼウスじゃ」

「……じいさん」

「なんじゃ。俺の凄さに驚いてしまったのか」

目の前のじいさん、どや顔を止めてくれ、うっかり殴ってしまいそう  
うだ。

「いや、爺さんに最高の老後施設を教えてやる！」

最高に良い笑顔で言った。

「……儂、泣くぞ」

自称・神は目尻に涙を溜めていた。

「それより、何故俺は天界に居るんだ？」

「それよりって……最初に言った通りじゃよ。儂が、お主の運命を  
うっかり変えてしまつて、死んでしまつた訳じゃ……テヘツ」

「テヘツ　じゃねーよ！！　うっかり、人殺すな！！」

爺さん、いい年こいて、そんなことすんな。ただ気持ち悪いだけだ  
ぞ。

「だが、自分が死んだことを否定しないんじゃな」

「まあな。車に轢かれたときに、自分がもう駄目なのが分かったか  
らな」

本当に轢かれた後、折れてない骨が無いんじゃないのかと思つたぐ  
らいだから。

「そんな、お主に違う世界に転生させるのじゃよ」

「本当か！」

「本当じゃ。儂がうつかり殺してしまったからな。あと、転生させるのじゃが、三つ程好きな能力を与えよう。アニメ、漫画も可能じゃよ」

「なんで、三つなんだ？」

「何となくじゃ」

「ですよね」

その後、能力を考えた。突然だから、かなり時間が掛かったが決まった。

「決まったぜ」

「じゃあ、まず一つ目じゃ」

「一つ目は、劇場版のニルヴァーシュ幼生に全てのKLFを付けた物」

「結構、細かいのう。二つ目じゃ」

「その前に、転生って俺何歳から始まるんだ？」

これは聞いとかなないと。転生して早速黒歴史は阻止したい。

「赤んぼ」九歳の状態をお願いします！！」「う、うむ」

これで、黒歴史回避だ！

「最後じゃ」

「ない。というか、三つ目は転生後で良いか？」

「珍しい。全部使うのだと思ってたのじゃが。では、三つ目は転生後じゃな」

「で、この後どうするんだ？」

「じゃあ、転生してこい。ではな、新しい人生楽しむのじゃよ」

「爺さんに、うっかり殺されなければな」

目の前に光り輝く扉が出現した。その扉を開こうと手を掛けた時、扉が突然上昇した。

「いや、俺が落ちてるんだ!!」

「お約束じゃよ。お約束。仕返しじゃがな」

「仕返して言ったな!!!このじじい!!!」

最後にそう言っつて、穴に落ちて行った。

「ふむ、今回の転生者は前の奴より、死んだことを受け止めていたか……さて、今度はどんな物語が描かれるのじゃろうか……だが、長く生きていて、久々に素になれたのう」

白髪のじいさんは、少年を落とした穴の所を見て微笑んでいた。

## 出会い（前書き）

関西語、ムリポ。話し合いが無理。というか、戦闘になったらおれ死にそう。

## 出会い

目が覚めると、そこは蒼い空が広がっていた。

「ここは、知らない天井だ。と言いたかった」

上半身だけ起こし周りを見ると、白い手紙が置いてあった。手紙を開いて見ると、自称・神ゼウスの名が書いてあった。

『僕は本当に神じゃ』

「嘘つけ。というか、俺が言ったことを手紙でツッコミ貰ったの始めてだぞ。で、続きは……」

『この手紙を読んでいるということは、転生したようじゃな。お主の体は今七歳だが、親や戸籍などが無い状態だ。まあ、上手く生きてくれ』

ちよー！戸籍が無いってマジかー！！ 黒歴史はないメリットだが、デメリットの方が大きいわ！

「しかも、上手く生きてくれ、っておい！ その前にこの世界の事を知っとかないとな」

こんな能力を得られるってことは、危険なことが確実にあるってものだ。そうなれば、速行動だ！

「やっぱり情報は図書館だな」

「もきゅー！」

もきゅー？

下を見ると、そこにはニルヴァーシュがいた。

「ニルヴァーシュ？」

「もきゅー！」

やべー、何、この可愛さ。ものすごく抱きしめたい！

俺は、ニルヴァーシュを持ちあげた。や、やわらかい。

「でも、名前長いな。いつその事短くしてみるか」

ヴァ、ヴァーシュ、なんか違うな。ニル、食材じゃないんだから。ならこれだな。

「お前の新しい名前はルヴァだ」

「もきゅー」

頭の上で、とてもうれしそうな声を出した。

いつの間に頭の上！…こいつ、やるな。

「じゃあ、図書館行くぞ」

「もきゅ！」

まだ見ず図書館に向かって歩き出した。

地形が分からない一人と一匹？は案の定迷子になった。だが、現地の人たちは意外と優しく図書館の道のりを親切に教えてくれた。

「これが、図書館。ルヴァは縫いぐるみの振りをしていてくれ。図書館って動物持ち込み駄目だからな」

「もきゅ」

敬礼の真似をして、そのまま動かなくなった。決して、死んでないからな。

図書館に入って、最初に日本地図を探した。本が多くある所で意外と早く見つかった。

「……海鳴市！　なんだ此处、日本でこんな都市無かったはずだ！」

海鳴市……なんか、聞き覚えがあるな。まあ良いか。

男は日本地図を元あった場所に戻して出口に向かった。

「海鳴市、何か聞き覚えが……あ」

男の目に車椅子に乗った茶髪の少女が本を取ろうと手を伸ばすが届かない様子だった。男は少女に近づき、取ろうとしていた本を手にとった。

「これで良いのか？」

「はい。ありがとうございます。」

「ついでに、他に取り物あるか？」

「じゃあ、これとあれ取ってください。あと」

あれ、遠慮が全くない。もつか俺の両腕。

「本当に、ありがとうございます。」

「良いの良いの、困った時はお互いさまって言っだろう」

「そっちな。でも、本も持っけしもつて……」

「こっいつ時に男手が必要なんだぜ」

今、俺は十冊の本を持ってる。意外と重いんだなこれが。

「そっそう。君の名前なんて言うんだ？まだ聞いて無かったしな」

「八神はやて、いいいます」

八神はやて？　なんか、聞き覚えが確実にある前世ら辺で。

「ひらがなで、はやて。変な名前やる」

「そんなことないぞ。良い名前だと思っよ」

「ありがとう。所で君の名前は？」

「お、俺の名前は……」

名前か前世の名前は確か。あれ名前が思い出せない。確か三文字だったはず。思い出せないなら新しい名前考えるか。

「どないしたん？」

「……俺の名前は銀一だ。多分」

「多分って偽名かい！」

なんか、つつこまれたが、本当に思い出せないんだなこれが。

「戸籍があれば自分の名前が分かるはずなんだが、俺には親も居ない、戸籍も無い、家も無い、本当に無い無いづくしだな」

「ごめんなさい」

「あ、間違えた。家族は居るな」

「ほんまかい」

「もう動いていいぞ、ルヴァ」

そういうと、頭の上にいるニルヴァーシュ、ルヴァは顔をむくつと上げた。

「もきゅ」

はやては驚いている。

「な、なんやこれ」

「ルヴァだが？」「もきゅ？」

「さ、触らしてくれへんか？」

頭の上にいるルヴァを持ちはやてに渡した。はやてはルヴァを触っている。

これで場が和んだ。作戦通りだ。

「そつや。家が無いなら家にくる？」

「でも、御家族とかの確認を取ってから」

「うちには家族がおらへん」

地雷踏んだ気分だよ。ルヴァが心配そうに二人の顔を見ている。

「来てくれへんかな？」

涙目の上目づかい、前世でこんなことなかったのに。くっ、折れる。

「じゃあ、お邪魔させてもらうぞ」

「もきゆ  
」

「ほんまか！」

「本当だ  
」

はやての本を持ちはやての家に向かった。

## 出会い（後書き）

アドバイスor感想待ってます！

## 異変（前書き）

もう、何書いていいか分らん……。

## 異変

「はやての家、凄く綺麗だし。料理も上手だし。はやてが奥さんの男子はきつと恵まれているだろうな」

「もきゆ、もきゆ」

「ルヴァもそう思うか」

「突然、何話してるんや！」

はやては頬を赤く染めた。

今、俺とルヴァは、はやての家でシチューを食べている。これが、驚くほど上手い、特に他の人と一緒に食べるとな……。

「どうしたんや？ 銀一」

「どうもしないよ。ただ、誰かと一緒に飯を食うのが久し振りだったからな」

「そつやな。私も一人で食べるより、大勢で食べた方が楽しいんよ」

「当然だ！」

「もきゆ！」

また、シチューをおかわりするため立ち上がった。

シチューをよそって、席に戻ると、はやてが何かを言いたそうにしていた。

「どうした、はやて？ トイレか？」

「違うねん！ えっと、明後日、私の誕生日なんや」

「もしかして、祝って欲しい、と」

「あかんかな」

「別に良いぞ。というか、はやてには恩があるからな」

家がないから、このままホームレスになるんじゃないかと考えていたら、はやてが泊まって良いよて、言ってくれたからな。

「ホンマに、ありがとう」

夕食の後片付けを終えて、次にはやてと一緒に風呂入ろう、と言ってきたが、流石に本気で断った。

俺も風呂から出る。

「もう夜遅いから寝ようぜ……って、俺どこに寝れば良いんだ！！」

まあ、ソファーに寝ればいいか。と考えていたら、はやてが唐突に爆弾発言をしてきた。

「私と一緒に寝てくれへんか？」

「いや、不味いだろ。もしかしたら、夜な夜な襲つかもしれないだろ」

「銀一はそんなことせえへん。あと、銀一なら襲われてもかまわへん」

なんか、後半、変なことが聞こえたような……気にしない、気にしたら負けだ！

「でもな、不味いだろ」

「駄目なん」

上目づかいで見ないで。もう少年のHPはゼロよ。

「……良いよ」

「ほんまかい。やったで」

銀一とはやて、ルヴァは一緒に夢の世界へ旅立った。

なんやかんだで、次の日の昼過ぎ。今、海鳴大学病院に来ている。なんかの検査のようだ。

「それにしても暇だ。待つのが苦手なんだがな」

「もきゅー」

誰もいない待合室でルヴァの顔を引っ張っている。本当に暇だ。

「えっと、君が銀一君かな？」

「そうだが……どちらさん？」

「私は、この病院の医師で、はやてちゃんの主治医の石田 幸恵よ」

「で、なんのようだ？」

「はやてちゃんから聞いたわよ、君のこと」

「そうですね。俺は色々無いですからね。でも、余り気にしてませんよ、何も無いなら、これ以上無くならないからな」

「でも、困ったことが合ったら何時でも言っ、少しばかり協力できるから。あと、はやてちゃんをよろしくね」

「当然だ！」

そういうと、石田医師は、はやてが入っていった診療室に戻っていた。

それから数分後。声が聞こえ、はやてが戻ってきた。

「おう。戻ってきたか」

「石田医師が銀一君をよろしく、って言ってたん」

「そうか。はやて、今日先に帰ってくれないか、ちょっと用事があるからな」

「そうなん？ 気をつけてな」

病院で、はやてと別れた後。銀一達は転生した最初の場所に来ていた。

「ルヴァ、変身の仕方分かるか？」

「もきゅ！」

当たり前だ！　と言わんばかりに返事をした。

「で、どうするんだ？」

すると、ルヴァは頭に手を置いた。そしたら、頭の中に起動方法が浮かんできた。

なる、意外と簡単だな。機体名を呼べば良いんだな。

「じゃあ、ニルヴァーシュー type Zero spec3！」

そう言うと、銀一とルヴァと融合した。そして、白い光が銀一を包み込む。

「これが、神に貰った力か……」

銀一が纏ったのは、白い身体に緑色の線が入っている。

「解除」

再び白い光に包まれ、元の姿に戻った。

「今度は、ニルヴァーシュー」

Type Zero!

また、光に包まれ今度は白とピンクのカラーリングの機械的な身体が現れた。

「すげー！　じゃあ、試し飛びしてみるか」

手に持つてるリフボードに乗って、空の波に乗る。  
ボードから緑色の光が流れ出てる。

試し飛びを終え地面に降りる。銀一が「解除」と言つと機械的な身体から人の身体に戻った。

「帰るか」

「もきゅ」

二人は家路に着いた。

帰るか途中で猫に何か警告されたが無視だ。喋る猫自体が、もう怪し過ぎる。

無事帰宅

「はやて、帰ったぞ」

リビングに帰ったが、誰もいなかった。

誰も居ない……まあ、いいか。テレビ見よ。

テレビを付けて、ルヴァを引っ張りながら見る。

数分後、突然、ルヴァが銀一から飛び出し玄関に向かっていった。

「ただいま……もう、大丈夫やから」

「またまた、そんなこと言って、恥ずかしくて」

「もきゅきゅ！」

「なんで、此処にニルヴァーシユが!？」

あら、はやてにルヴァの本当の名前教えてないのに？

銀一は立ち上がり玄関に向かった。

「はやて……誰？」

目の前にはこの世界で有り得ない容姿をした人がいた。金髪のオツ  
ドアイ……転生者？

「貴様こそ誰だ！ 俺のはやてに手をだしやがって」

「知り合いか？」

はやてに聞くと、首を横に振る。

「俺の方が、はやてと一緒にいる時間が長いんだ！」

暴走しているよ、このボケ。じいさんより非道いよ。

「そーですか。それは、よーござんすね」

そう言つて、ポケを蹴り飛ばし外に出した。そして、扉を閉めて鍵を閉じた。

「いつも、あんな感じなのか？」

「そうや。よく、分からへんけど、いつも、図書館に行く絡まれるんよ」

「本当に、何なんだ？ あのポケは」

「もきゅ、もきゅ」

ルヴァは、ホント、ホントと言ってるようだ。

「……あ、そうそう。はやてに言いたい事があるんだが」

「なんや？」

「いや、一日早い誕生日プレゼントを上げようと思ってな」「ほんまか。楽しみや！」

本当に嬉しそうだな。

「プレゼントはな、俺らが、はやての家族になるって分けた」「ありがとうな」

はやての目尻に涙がたまる。

お、俺何か失敗したのか！

「は、はやて……」

「嬉しいんや、家族ができて」

「そうか。それはよかった……腹減ったし、飯作ろうぜ！」

「そつやな。今日は鍋やで！」

「よっしゃ！！ 鍋祭りだ！」

その後、二人と一匹で鍋を食した。今日は一段と美味しかったと記憶に残った。

その日の深夜。珍しく夜更かしをした。

「もう寝るかな……」

時計の針は、そろそろ12時を指そうとする。

なんか胸騒ぎがする……

「ルヴァ、来てくれ」

「もきゅ？」

銀一はルヴァを持った。この胸騒ぎが外れてくれると良いけどな。

時計の針が12時を指したとき、異変が起こった。

突然、はやての部屋からピンク色の光が洩れる。

「な、なんだ！！ はやて！！」銀一は、はやての部屋に向かい扉を開く。

「動くな」

冷酷な声と共に、首もとに剣を突きつけられる。

## 異変（後書き）

無理やり過ぎた！！ もしこれで戦闘があったら作者逃亡します。  
いや、次回もしかしたら戦闘が……ノウ！！

闇の書とか他いろいろ(前書き)

ヴォルケンリッター書くの難しいぜよ。

## 闇の書とか他いろいろ

「ところで、貴様……何者だ？」

名前を聞くときは自分からだろ、と心の中で呟く。

「ただの、一般人だ。それより、お前は誰だ？」

「私はヴォルケン」「先手必勝!!」「くっ!!」

ピンクのポニーテールの女性を蹴り飛ばした。だが、ガードされ、思ったより飛ばない。

「はやて!!がは!!」

少しだけスキが出来、はやてに近づこうとすると、身体に凄い衝撃が走り、本棚に激突した。

一撃で、こんなダメージか……なあああ!!。

銀一は本棚に激突して、衝撃で上から本が落ちてきた。

「大丈夫なのか、あいつ」

「大丈夫だろ」

大丈夫じゃね!! 本の角が頭に、クリイティカルヒットしたんだぞ!!……でも勝ち目がない……あれ、使っしかないな。

「ルヴァ……ニルヴァーシュー Type Zero spec 3」

「もきゅー！」

光に包まれ、白い身体に緑色の線がはいっている。

「お前、何者なんだ」

変身した後、ピンク色のポニーテールの女性と睨み合う。

「シグナム……」

赤毛の少女が緊迫した空気の中で、気の抜けた声を出した。

「どっした？」

「こいつ……気絶してるように見えんだけど」

赤毛の少女は、はやてを指差している。

「もきゅー」

はやては目を回し気絶していた。

「はやてちゃん……良かったわ、なんともなくて」

今、海鳴大学病院のベッドで、はやてと石田医師が話している。

「……で、誰なのあの人達。銀一君からは、はやての遠い親戚が、  
仮装してやってきた、て言うけど」

「ああ、えっと……」

『御命令を頂ければ、お力になれますが……いががいたしましょう』

な、なんや！？ 突然、頭の中に声が聞こえるんや！

『思念通話です。心で御命令を念じて頂ければ』

はやては、頭を少し縦に振った。

『ほんなら、命令やなくてお願いや。ちょーと、あたしに話し合  
せてな』

「はい」

「えっと、石田先生。実は、あの人達、銀一が言ってたように、親  
戚で……」

「親戚！？」

石田医師は驚いた。

「遠くから、私のお誕生日をお祝いに来てくれたんよ。それで、仮  
装までしてくれてたのに、それにびっくりしすぎたんよ……」

「……そうなんですよ」

「その通りです」

その後、はやては苦笑いをした。

「ところで、石田先生。銀一、どないしたん？」

「銀一君？ たしか、はやてちゃんを送り届けた後、用事があるから先に帰ります、て言ってたわ」

「用事って、どないしたんやろ？」

前も用がある、って言ってたんな。用て、ほんま、なんやろな？」

「で、誰だ。俺を付けている野郎は、隠れないで出てこい」

そう言つと、後ろから……じゃなく、前から出てきた。

「俺のはやてに手を出すな」

うわー、バカがいるよ。

銀一の目前には、金髪のおッドアイの転生者らしき人が、堂々と変なん事を言った。

「カエレ！」

「もきゅー！」

これで帰ってくれたなら、俺は泣きながら感謝するぞ。

「はやては俺のハーレムの一員なんだぞ！」

うわ。話全く聞いてねー。というか、訳わかんないことほざいてるし。

「帰るか……」

「もきゅ……」

二人は早歩きで、その場を去った。しかし、バカに捕まった。

「いくら言っても手を出すのなら、お前を倒す」

なんでさ。いつの間に、そんな展開になってるんだ……不幸だ。

「コード、麒麟ソウルゲイン。起動！！」

《了解》

機械の音が聞こえると、水色ぼい装甲が展開される。見た目が近接攻撃型の装甲に包まれたバカ。

「はあ、不幸だ……」

「怖じ気付いたのか！」

「そんなわけねーよ。ニルヴァーシューType Zero Spe  
c2」

「もきゅー！」

白とピンクの装甲を纏った銀一がいた。

「ニルヴァーシユか……行くぞ、って逃げるな！」

「逃げるが勝ちさ！」

銀一が起動させた理由。それは、逃げる為だった。

ポケからなんとか逃げ切り、二度と関わりたくない、と考えながら、装甲を解き家に帰る。

「はやてー、帰ったぞ」

あれ、誰もいないのか？

そう思った銀一はリビングに向かった。

「貴様は！」

「……へ」

なんで、目の前にコスプレ集団がいるんだ。

「どないしたんや、シグナム？」

考えていたら、キッチンからはやてが出てきた。

「すみません。よく分からない人がいたので」

「ちょー！ちゃんと自己紹介しただろ！」

「言っていないだろー！！」

「な、なんだってー！！」

ヴィータがつっこむ。その後、はやてが話す。

「銀ーやないか。ところで、用事は終わったん？」

「ああ、終わったぞ」

バカから逃げきったからな。

「二人にお話があります」

突然、金髪の女性が話してきた。

「なんや？」

「私達のこと……」

金髪の女性は自分達がどうゆう者が、魔法の事を話した。

「闇の書……」

何か引つかかるな……。

「魔法……銀一も使えるん？」

「さあ？」

「もきゅ？」

俺の場合は、体に装甲を着けてるだけで、魔法とは関係ないと思う。  
ルヴァも頭を傾げてるしな。

「聞きそびれたが、お前は何者なんだ？」

「ただの一般人」

「じゃあ、そいつは何なんだ!!」

赤毛の少女が睨みを利かしてルヴァを指差す。

「家族」

「もきゅ!!」

銀一の回答に不満なのか睨み続けられる。

「はあ、わかった……話してやるからの赤毛の少女」

「赤毛の少女じゃねえ!!」

無視だ無視。

銀一は話した。自分の事、ルヴァの事。転生後の作り話を話した。

「まあ、こんな感じだ」

「よく生きてたな」

さっきの説明で出た赤毛の少女ことヴィータは、銀一の生命力呆れていた。

「ところで、闇の書の主としてどうすんだ？」

「そやねー、闇の書の主として衣食住、きっちり見なあかんということや」

「……は？」「……」

闇の書の主が命令を出すと思いきや真剣になっていたヴォルケンリッタ  
ーと呼ばれる方々。

だったが、はやての平凡な事に呆気ない声を出すだけだった。

闇の書とか他いろいろ(後書き)

もうグダグダだ!! 戦闘シーンを回避するのだ(作者が死ぬ)

あと、感想とアドバイスお願いします。

## 日常1（前書き）

今年最後の更新です。次は一週間後です。

それでは、ゆっくりしてってねー！

## 日常1

然だが俺の自己紹介をしよう。俺は、銀一。転生者だ。転生後、ホームレスになるしかなかった俺を居候させてくれた。どうして、唐突にこんな事を言うかと、ただ単に現実から逃げたいからだ。

それは、目の前に得体の知らない何かがあるからだ。

どうしてそうなったかというと、うっかり言った一言が原因だった。

新しく、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラを家族に迎え数日だった頃だ。

「こん中で、料理が上手そうなのはやて以外で、シャマルぽそう」

銀一が全員いるリビングで呟く。

「そやな……シャマルやってみいへん？」

「そんな、はやてちゃん」

「大丈夫だ。俺が責任もって食うから」

「そこまで言うなら……」

銀一はそう言うと、シャマルは折れたようだ。

早速作り始めている。

「ところで、シャマルって料理上手いのか？」

「……………」

みんな目を反らすか、哀れ見てくる。まさか、嵌められた？

「ま、まさか……みんな食べたのか」

「……愁傷様や」

「骨だけは拾ってやるよ」

「遺言があるなら残しておけ」

はやて、ヴィータ、シグナムの順番に話してきた。もしかして、死亡フラグ。

ヤバい、汗が止まらない。なんか、キッチンから黒煙が上がってるんですけど……！！

「シグナム、代わり……無理だ！」ですよねー」

ヤバい、死の宣告が近づいてくる……！ 誰かに擦り付けなければ。

「ヴィータ、代わり……くっ……くっ……！！」

目ぐらい合わせてくれても……くっ、後はやてしか。

はやてに擦り付けようと話しかけようとしたら、犬になってるザフィーラに止められる。

「ザフィーラ、かw「覚悟を決める」はい……」

退路がない!! 最終手段だ!!

銀一は立ち上がり逃亡をはかるが……。

「銀一さん、どこに行くんですか?」

得体の知れない物を持ったシャマルがいた。

「は、はははは」

こうして冒頭に戻る。

得体の知れない物と向き合う銀一。

逃げるな!勝ち取れ!さすれば与えれん!!行くぞ、俺!!

「あむ……」

「ど、どうですか?」

なんだこれ、甘いような、辛いような、すっぱい? 苦い、違うな  
これは、人が手を出してはいけないものだ!!

銀一はシャマルの料理もどきを無理やり口にねじ込んだ。

「シャマル……」

「は、はい！」

「旨かったぞ!？」

「そうですね！」

「はやて、俺は用があるから少し逝ってくる……」

「文字がちゃうねん!！」

そこツツコまない。

銀一は早足でその場を立ち去った。

シャマル以外の人達は銀一のことを「男だ(や)」と呟いた。

「みんなの分もありますからね」

「「「「は?」「」「」

はやて宅に断末魔が聞こえたの言うまでもない。

## 日常1（後書き）

感想またアドバイスお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9110z/>

---

リリカルなのは～空の波～

2011年12月31日10時49分発行